
IRREGULAR (2 0 0 9 年試作版)

616

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IRREGULAR（2009年試作版）

【Nコード】

N3018J

【作者名】

616

【あらすじ】

挿絵があります。苦手な方は、挿絵機能をオフにしてご覧ください。

あの日あの時あの場所に、もし筋書きにない誰かが居たとしたら・・・？

人のすべてを物語とし、また世界とする。

舞台は物語の世界。傍観者と異端者。愚か者と愛を知る者。逸らす眼と全てを見通す眼。物語の世界を舞台に、三人の主人公が『筋書き』に巻き込まれていく。

『可能性を信じましょう。これはきっと、ハッピーエンドの物語なのだから』

笑い有・シリアス有・登場人物多々な、多重異世界クロスオーバー系トリップファンタジー。

はじめに

3月5日 9話アップ
3月3日 8話アップ

PV出来ました。(http://www.ni
covidéo.jp/watch/sm9897862)

2月18日 六話挿絵・おまけ追加
エルがカッコつきました
2月15日 五話加筆修正

2月9日 六話アップ
三四五話挿絵追加

1月29日 四話修正(お兄ちゃんが喋りました)
全話修正(読みやすさを考慮した行間修正なので、内
容は変化していません)

三話修正・再アップ

1月26日 本編四話
一〜三におまけ追加

1月15日 本編三話 二話挿絵追加
1月12日 本編二話

挿絵追加

1月7日 開始(序章〜本編一話)
1月6日 開通

- - - - -
突然の予告無しな改訂・加筆修正が予想されますので、その場合
はここに記載いたします。

また、プロトタイプのIRREGULARS イレギュラーに

比べ、挿絵があるため更新速度が落ちます。

この作品は前作・『IRREGULARS イレギュラー』のりメイク版となります。

全面練り直し＆書き直しのため、展開は一部変わりますが、最終的なオチ（オチて）は変わりません。

舞台は物語の世界。

『人のすべてを物語とし、その物語が世界とする』とし、その筋書きを管理する物語管理局、第六部隊員の三人が主人公です。

女性向け表現が一部ありますが（女装とか 女装 とか 女装 と か）全年齢向けになっています。

作者は大変調子に乗りやすく、「この人好き！」と、ラブコールがあると呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃーんがあつたりして。

挿絵があるため、プロトタイプの時のように毎日更新は出来ません。更新頻度は約一か月に2・3回となることが予想されます。また、一度に数話連続投稿の後は更新がその分止まる可能性もあります。

その挿絵も話数が増えるにしたがつてあつたりなかったりになる可能性大です。

しかしその分、加筆修正や挿絵追加等が頻繁にあると思うので、きまぐれに覗いてやったりすると増えているかもしれません。

学が無いので、誤字脱字は優しく教えていただけるとありがたいです。

挿絵はコピー紙に鉛筆でガッサガサです。

こんな感じ

> i 3 7 3 5
— 1 5 7
<

本家ブログ・幻空帖 (<http://ameblo.jp/ume>)
- 6 / -

PVできました。<http://www.nicovideo.jp/watch/sm9897862>

> i 3 7 3 6 — 1 5 7 <

白

あれを夢だと信じたい。

10年前

踏みしめられて固まりかけた雪が足元で鳴る。まだ二つ分の足跡が残るくらいには柔らかかった。

空からは未だ、白い粉雪が生産され続けている。

「兄さん、何で今日は迎えなんて。いつも一人で帰ってるのに」

二人とも周囲に見えるものは無視する。耳も、お互いの声以外は聞こえないのだ。

「え？今日って何かあるからじゃないの？」きゅっと、兄は眉を顰めた。兄の足が人通りの少ない道へと向く。自然、自分もその背を追った。

声が遠くなる。

「父さんと母さんが何かサプライズでも考えてるのかな」

「……でも今日何の日でも無いですよ？」

彼は荷物を持った方の手で白い頭を掻いた。「う？ん……」

ついでとばかりに、もう片方の手で傍らの、自分の頭も混ぜた。

垂れた青い目が細くなる。

「母さんの気まぐれじゃない？じゃなかったら、何か父さんの出世祝い……とかは無い、か。うん」

「ははっ、そうですね」

「はは……」

自分たち以外は誰もいない回り道。家はずっと遠くなるし、この季節はとても寒くて正直きつい。

でもへらりと兄さんは苦笑いして。「無いよねえ」

（……自分もあんなふうに笑ったほうがいいのだろうか）

その時だった。

兄の目が一点を見つめる。

（兄さん？）

驚いたのを覚えていた。

兄のそんな顔は一度だって見たことが無かった。何かがおかしそう思った。

呼吸が止まりそうになる。背中に冷水が伝った。

「……兄さん」

「ん？」

「早く帰りましょう、か」

一回り大きい手を握ると、頭を撫でられた。

「兄さん？」

「……ごめん」

「え？」

ぐるりと一回、かき回すように撫ぜる。「先、帰ってて」

一刻の時間も惜しいというように、

「鍵は持ってるね」

自分の分まで荷物だけ奪って、

「ごめん。すぐ帰るからって言うと言って」

肩ほどの、白い髪の毛はすぐに道の向こうに消えた。

我に返り、その背を見送って走り出す。

世界がいびつに歪んで見えて、どうしようもなく、怖かった。

あれほど兄が泣いた日はあっただろうか。

兄の涙を、否、自分以外のあの母の青い目を、父の濃紫の目を見たのは、あれが最後である。

両親は、あの時の真っ白の雪の様な灰になった。

今思えば、あの時の兄は今の自分と同じ年だったのだが、まだ自分はある風には笑えないまま、文字通り時を凍らせて今ここに居るのである。

黒

これは夢じゃない。

> i 3 7 3 5 — 1 5 7 <

7年前

（まただわ）

身にまとっているのはシャツと黒いローブだけだ。ひやりとした夜の空気は涼しいを一足とび越えたくらいで、我慢できないことは無いが寒くてたまらない。

ここは月明かりだけの世界なのだろうか。

人工的な明りで星は見えにくくなっているというのは本当らしかった。いままで生きてきて、天の川なんて見たことがない。まさに『ミルキーウェイ』だ。

（まるで黒い布にミルクぶちまけたみたい）

しかもそのままわすれられて、放置されているのだ。ミルクは布にしみ込んで、布の色を変えている。星は散ったミルクの雫で。

（今日は新月ね）

地面は見えないほど真っ黒だ。

そろそろと手探りで地面を確かめながら腰をおろした。地面が乾いているのが幸いである。

「……………どれくらいで迎えが来るかしら」

一度渡ってしまったたら自力ではなかなか戻ることが出来ない。「迷子は動くな」はもはや合言葉。今頃搜索隊が組まれていることだろう。

（泣くな）

「……………寂しい」程度で、女が泣くな」

誰も見ていやしないのに、涙を流すのはもったいない。母の言葉。（今の私は遭難者だもの。いつ救助が来るのかもわからないのよ）

今ここで泣くのは無駄だ。

（……………あいつは逃げやがったんだ！）

（私は逃げないわ）

（そっくりねえ……………）

（ええそうよ。でも真似なんて絶対にしてやらないから）

（……………君はとても、似てるよ）

（知ってるわよ）

あの人のことで泣くのは癪に障る。

（強くなりたい）

（あれも分かりにくかったけど、とても強かったよ）

「……知ってるわ」

（でも、知ってるだけ）

ここに居るエリカ＝東＝クロックフォードは私だ。

「……そのご立派な糞親父をノックアウト出来るくらい、強くなつてやるわよ」

ああでも、

（星なんて見えなくてもいいの）

少しばかりあの明るい濃紺と黄色い月がほしい。

エリカは母似。
 > i
 3
 7
 3
 9
 —
 1
 5
 7
 <

> i
 3
 7
 3
 4
 —
 1
 5
 7
 <

黒

『キミはこの世界に不要な人間です』

7年前 聖夜

幼いながらも、エリカの頭は悪くはなかった。

母はもつと優しい言葉で教えてくれたが、まあ、それが真実で事実なのだろうとは理解できた。ただ、少し思ったのは10も越えない子供相手にいい大人がもう少し言い方は無かったのかという、何とも子供らしくない感想を持っただけで。

何も思わなかったわけではなく、確かにその言葉には視界が回るほどの衝撃を受けたのだが、それも一時ほどのことで、後に残るのはただ純粹な怒りのみだった。

そもそも、“ソレ”を告げに来た大人が一番悪い。

あの大人がもう少し言葉を選びさえすれば、自分は母を心配させることもなかったのだ。

それは母始め、普段エリカの事を気にもかけてもしない祖父ですらも同じだったようで、その大人を追い出した後に『なんて礼儀の無い

やつだ』と大人二人が揃って激怒しながら家中を歩き回るといふ奇妙な光景が出来上がった。

祖父いわく、『こういった人の人生を左右させるような大切な話をしに来るのに何故あんな下っ端を寄越すのか（しかしエリカの目にはあの人はどう見てもやり手っぽい人に見えた）、誠意を見せる気もない態度でうちの娘を預けると思っているのか、あんな人間をこの家に入りさせた事自体が不快だ』云々。

追い出した本人である母は、あの大人が踏み入れた場所に塩を撒き、次いでとばかりに玄関に（呪いらしき）魔法をかけていた。

あのマットを踏んだら全治3週間は固くない。

エリカはそんな大人たちを見て思う。

「塩の塊は痛かっただろうな」と。

しかも、ダチヨウの卵大の結晶そのままを学生時代大活躍したという肩で投げつけたのだから、きつと大きな痣が出来上がっているに違いない。

何はともあれ、エリカ以上に彼らが怒ってくれたので、エリカはそんな的外れたことを思うしかなかったのだ。

母は言う。

「私もアレも昔は同じ体質だった。他は知らないがウチでは普通だから気に病むことはない」

祖父は言う。

「アレとコレの子供なんだ、当たり前だ。お前は確かにオカシイところが一ツ二ツあるがどうせコレみたいにいつか治る」

エリカはこう返した。

「でもアレみたいに帰ってこれなくなったらいやだわ。もしずっとこのままだったら一生普通に仕事に就くのも生活するのも難しいじゃない。だから私行ってみようと思うの」

アレはエリカの父である。外見は全く似ていないが、そっくりな親子だった。

白

人の見、感じるすべてを、ただ一つの物語とする。

5年前

金の右目が疼く。

この日、ビスの長い前髪に隠れた右目はやけに調子が良く、要らないものまで見せていた。

視界の端に真つ赤な髪の水がちらつく。壁に寄り掛かるようにして、じつとこちらを見つめるその姿はこんな場所だということにも関わらず、やけに目に付いた。

幼少から見飽きたそれに嘆息する。目を向ければ髪の間から目を細めてゆるりと笑いかけるのだ。その瞳の色はこの右目と同じ金だが、身内といえど不気味としか言いようがない。

『彼女』は父方の『おばさま』である。父は幼少を彼女のもとで過ごしたという。

父に彼女以外の血縁者は無く、その彼女も13のときに居なくなり、現在こうやってその子供の目の前に現れる。

(やっぱり調子が良すぎる)

視界を埋めるものが多すぎてまったく知らない場所に来たような錯覚に陥る。気分が悪い。

出来れば早く帰りたいところであるが、今回ばかりはいくらなんでもそうはいかなかった。

今までこれほどの状態になったことは数えるほどしかない。原因と言えば、おそらく気が高ぶっているからだろうと憶測は付いた。

これだけの人間がいながら、皆、静かに順番を待つばかりだ。それでも各各思うところはあるのか、『見える』ものは様々だった。中にはビス自身に向けられるものもある。

自分はこの場所に浮いていると思った。

これからのことでビス自身の一生は決まるといってもいい。少なくとも、最も広い道が拓くようになることは確かだ。

その道の真ん中を歩くことは無理にしても、父と同じ道を選ぶことはもはや必然としか言いようがない。

兄には待たせたと思う。頭が下がるばかりだった。

一族の血を引きながら、その力が自分にはなかったことは、兄にあったことは、幸か不幸か。

感情の無い声でゆっくりと名前が呼ばれていく。

『ビス』ケイリスク』

心なしか、他よりも機械じみた声だったのは気のせいだろうか。

（いけませんね）自覚していたより幾分緊張しているらしい。冷静にならなくては。

突き刺さるような視線を感じながら扉に手をかけた。

> i 3 7 3 8 — 1 5 7 <

今頃兄はどうしているだろうかと思ひながら。

(・・・父さんと、同じ道に)

赤

夢を見た。

二年前

目の前が真っ赤だった。

違う。これは火だ。

(火事?)

中で真っ黒い陽炎が揺れている。

や、

(・・・声)

いやだ

「嫌だ、おかあさん！おとうさああん！」

影が横切る。

桃色の髪が後を引く。

（なんで！）

晴光は目を剥いた。

「なんで………なんで！なんで、おかあさんおとうさんッ！」

腰まで伸びた髪は熱風に煽られて揺れている。

（………気持ち悪い）

リアルだ。

なんて悪趣味で、リアルな、夢。

彼女を知っている。

自分は、彼女を。

（もしかしてあの火の中の影は………）

想像してさらに喉の奥が疼いた。（………うげ。グロ）

その時だ。

大きな音を立てて屋根が崩れる。

ゴウゴウと音を立てて炎が大きくなり、目に見えて熱風が強くなつた。

煽られて、小柄な彼女は地面に手をつく。

「　　っおかあさぁあん！」

（・・・あ、そうだ。この後は）

知ってる。

俺は、知ってる。

（待てよ）

知ってる。

（おい待てよ）

「おとうさん・・・」

（待ってくれ。まさか、この後　　）

彼女がゆるゆると立ち上がった。

「……おねえちゃん」

助けて。

（やめろよ、おい）

まぶたの裏に浮かぶのは赤色一色だ。

揺れる赤

零れる赤

広がる、

赤。

（やめろ）

喉に、舌が張り付いた。

粘った唾液が接着剤のようにくっつけて、心なしか息も苦しい。

来てしまふ。

アレが、来てしまふ。

“アレ”は。

俺が、知っているこの先は

アレに、
アレを、

（ あの子が、殺される）

アレが、

（来る前に！）

「っファンツッ！！」

呼ぶ。

くらりとめまいと共に世界が一転した。

様に、見えた。

ぱしりと掴んだ腕は指が回るほどに細い。

紅色の瞳が自分を映す。

「行くぞ」声をかけたと同時に地を蹴った。

空気が熱い。

ゴウゴウという音が耳元でする。

風も強い。

しかし体の芯は冷えていた。

熱いのは、目ばかり。

赤

一年前

ぐっ、と晴光は腕を伸ばした。

ばきばきと凝り固まった肩が鳴る。普段じっとしているのが珍しいほどの彼は、そんな珍しい現象に面白がってもう一度おまけに肩を回した。

170を越す大柄な体躯。黒い短髪。目じりの下がった濃い茶色の瞳は人懐っこい大きな飼犬を連想させる。

ペンを置き、ざっと目の前の書類の記入漏れを見直し、満足したようにうなずいた。これが最後の書類である。

長い束縛から解放されて目に見えて うきうきとした笑顔で晴光は

肩越しに振りかえった。

「終わりましたけどオー！」

「大声出さないの！」

そっちのほうがよくほど大声だと晴光は口をとがらせる。

彼女はぱたぱたとスリッパを鳴らしながら傍らに立ち、書類を手にとった。

「はい。では、おめでとう」

「あざっす！」

「もう本採用なんだから敬語をきちんと使いなさい」

厳しく放たれた言葉に、ぐつ、と背を伸ばす。これから上司になるであろう人を前に、唇を湿らせ腰を折った。

「よろしくお願いしますっ！」

「はい。こちらこそよろしく」

笑いを漏らすと、彼女も目元を緩める。

「パートナーは？決まってるの？」

「決まってます。男女コンビがセオリーでしたよね」

「そう。男女それぞれだけでは出来ないことがあるからね。『本』は原則そうだ。」

あと局員宿舎に移ったら共同生活だから、今のうちに荷物纏めときなさい。……君のところのパートナーは、えーと」

「ファンです。医療系の補助の」

ニツ、と晴光は笑って、ピースサインをした。

> i 3 7 3 7 — 1 5 7 <

そして、その日。

2021年 三月三日

はじまりはじまり。

(おまけ。)

> i 3 7 4 0 — 1 5 7 <
序章扉の裏に描いてあった若かりし兄。

00

> i 3 7 3 2 — 1 5 7 <

こんなはずじゃなかった。

小さく、喉の奥でその言葉が引つかかった。

（こんなはずじゃなかった）

違う。違う。違う。こうじゃない。

こんなふうになりたかったわけじゃない。

視線を落とせば赤いというよりも、どす黒いもの。

顔を振ればそれが絡みつく自分の髪が頬にベタリと張り付いた。

視線を少し上げれば、

「こんな、はずじゃ……っ」

じわじわと灰色の地面が黒く染まっていく。

体の奥から染み出てくる冷たさが。

(こわい、こわい、こわいこわいこわいこわい……)

もう、居ない。

「……………っこわい……………」

どうして、どうして、(僕は、どこにいけばいいんだ……………)

君がいなければ、僕は、どうしたら。
なんで、

眼の前に影が落ちた。

光に照らされ、伸びた影は僕の元まで届く。あの人の傍らに立ちつくすあれは、僕を凝視していた。

僕も彼を見る。

あれの髪が風に揺れる。

あの人の黒髪は地面に張り付いたままだった。

僕の髪は、少し揺れた。

歯がカチカチ音を立てる。

蛇口を少しだけひねった様に、チヨロチヨロと頬を涙が伝った。

僕は、身勝手だったのだろうか。

僕の何かの行為が、あの人をこうさせたのではないだろうか。

僕の、せいで。

僕は、

> i 3 7 3 1 — 1 5 7 <

「僕のせい？」

そうか。

僕は、ただ、ほしかった。あれだけがほしかった。あの人はただひとつそれをくれたのだ。

あの人がただだった。僕には他に居なかった。あの人が、あの人が居た時は、全部がそれで良かったのに。全部、全部が嫌だ。今は全部が嫌だ。

もし、やり直せるの、なら。

それなら。

「・・・・・・・・そうだ」

やり直す？

「やり直す、か・・・・・・・・」
次がある。

「・・・・・・・・それでいいか・・・・・・・・」

やり直せる。きっと。

次は、貴方を死なせません。

だから

そつと、僕は薄い頁を撫でる。

ここは一ページ目。この物語の最初のページ。

物語はここから語られる。

これはきつと、ハッピーエンドの物語。

ここは物語から外れた色溢れる混沌の世界。

そして僕らは傍観者。

そして君はイレギュラー異端者。

愚かな神様は自分の無力にむせび泣く。

その周りに満たされるのは、羨望、欲望、希望、夢と現実、そして孤独。

一時の夢を見せるのもいい。

しかし神様はその先の現実を思つて泣く。

未来その先、その現実から目をそむけたくて人はまた夢を見る。

羨望に夢を見て、欲望を夢の糧とし、夢に希望をたくし……

ああなんて愚かだと神様は泣く。涙の流せないその目に水を垂らして神様は泣く。

傍観するのみの神様は、それこそが彼の仕事であつたけれど、だからこそ世界から弾かれる神様はいつ何時もひとりぼっち。

この世界の土台を作つたのは確かに彼だった。この世界は彼のものだ。

しかしその世界に緑を、赤を、青を、黒を白を色づけたのは、紛れもなく愚かな人々の夢だった。

なぜ自分が孤独に耐えなければならぬのか……！

そんな彼はただ、幸せになりたかつた、それだけだった。

$$\begin{array}{r}
 > \\
 i \\
 3 \\
 7 \\
 3 \\
 3 \\
 \hline
 1 \\
 5 \\
 7 \\
 <
 \end{array}$$

1 妖力奇談

障子が風にカタカタと揺れる。

外は曇天。薄暗い部屋、じりじりと少しずつ蠟燭が空を焼く。
。

闇にも映える目にも鮮やかな赤毛のその人は、ひざ下に垂れる裾をさばき百合の散る袂を畳に白い羽のように伸ばして三つ指をついた。

「よくぞこの辺境にいらつしゃいました御六名。私わたくしこの学園長代理の組学級長、雪女ユキオンナにございます。我ら学園関係者・教員・生徒一同、精一杯の助力をお約束いたしましたしょう」

その男とも女ともつかない声が座敷に響く。

雪女はそつと、下げていた頭をあげた。

切れ長の濡れた黒の大きな瞳を細め、それこそ人外の天女の如く。ゆるりとほほ笑んだ。

その時だった。

「晴光！！」

よけるはずだった小石を踏む。

バランスを崩し、ぐらりと、体が傾いだ。「おおっ！？」

落葉のまだ少ない季節、雨に固められた地面。勢いよく尻をついた晴光は、強かに打ちつけた腰をさすりながら顔をしかめた。

「つてえ……誰だよ……急に声掛けやがるやつは……」

『せ、晴光君、大丈夫？』

その声に土の付いた右手を軽く振ってこたえる。

「……あゝ」

視線の先で軽やかに、真っ赤なその鳥は飛び去って行った。

「なんですかもう……折角、俺が勝ちそうだったのに」

「馬鹿言ってんじゃないぞ！おっちょこちよい」

口を尖らせた晴光に、周りの青年たちが囁いたてた。むっとして睨

むと、ゲラゲラ笑われる。

戦闘担当の前線部隊、第四部隊の青年たちは例外無く晴光よりも年上で、中でも年の近い者達だった。

その第四部隊の隊長である彼女は大袈裟に溜息をつき、晴光とは比べ物にならない眼力の睨みを利かせる。短く刈った飴色の髪に男並みに筋骨隆々とした姿の上司に、ぴたりと彼らは押し黙った。

「鍛錬なら修練場で管理の届くところでしなさい。またあちこち壊されたら我が隊の遠征の食事がもつと貧しくなるよ」

ぼそぼそと母親に叱られた子供の様な謝罪が響いた。

「……で、隊長なんすか？」

「……日ごろから敬語はちゃんと使いなさいと言っているでしょう」

「隊長何かあつたんですか」

叱る以前の呆れたような声色に晴光はぴつと背を伸ばし、真面目に言い換える。「まあいいでしょう」片手でぐりぐりと彼女は晴光の頭を撫でまわした。

ぼそぼそと声を潜めて青年たちがこぼす。

「……隊長って晴光に甘いよな」

「ちげえよ、アレはほら、飼い主と飼い犬」

「馬鹿な子ほど可愛いってやつだよ」

「鼻屑だよなア、俺たちも頑張ってるのに。馬鹿なりに」

「あいつほどじゃねえけど、頭の緩さじゃ負けねエのになあ……」

「

「黙れ餓鬼共」

静かに響いた声に、一瞬で屈強な男たちが肩をすばめて小さくなった。条件反射で晴光も釣られて肩を跳ね上げる。

くるりと彼女は晴光に向き直り、苦笑して言った。

「遅いかったわね」

左手に晴光より一回り大きい赤い表紙の本を持ってほほ笑むエリカに、晴光は今しがた全力疾走してきたのにも関わらず、息も乱さないままだ罰が悪そうに頭を掻いた。

『ほほ笑む』といっても彼女のそれは、その口の端を曲げたそれはどことなくどす黒い。

此処は物語管理局本部入り口前のホールである。馴染みの受付のお姉さんに手を振ると、無愛想に手を振り返してきた。ちなみに彼女、『受付のお姉さん』というよりも『お局様』が似合う黒ぶち眼鏡のクールビューティーである。

「……………今回ってエリカも参加すんの？」

「ええまあ。私達だけじゃないみたいだけど」

そう言つて彼女はすつと半歩後ろに下がった。「ほら」

「え？」

エリカはホールの吹き抜けの上を指差した。晴光が視線をたどるが、二階の廊下の壁と会議室のドアが見えるばかりだ。「何？」

「馬鹿ね。あそこの廊下のズラーツと長い掲示板に『第四部隊所属
周 晴光 第五部隊所属 エリカ〃A〃クロックフォード
三月五日遠征』って書いてあるじゃない」

「見えねエよ！あんな掲示板の文字なんか！！」

「あら、日常的に力を使えてない証拠ね。精進なさい」

（「お前単体での任務だ」）

先ほどの女隊長の言った台詞がよみがえる。

「なあ、隊組むんなら隊長って誰だよ」

「えー……『隊長 第五部隊所属ビス・ケイリスク』……私と同じ第五部隊所属？知らないわね」

「『本』のほうは？」

「『ステイル』『ケイリスク』」

「あれ、同じ名字？」

「……」

「……エリカ？」

押し黙った彼女に晴光が声をかける。「どうした。何かあんのか？」

「あるっていうか……」

エリカはちらりと自分より高いところにある晴光の顔を見やって溜息を吐いた。

（なんか、今すっぱー馬鹿にされてる気がするなあ……）たぶん、もう少し勉強しなさいよ馬鹿ね」といったところだ。

エリカは少し小さく、しかしよく通る声で晴光に言った。

「……禁忌の『名字持ち』よ」

首をかしげる晴光に、「一般常識よ」とエリ力は溜息と共に吐いた。

おまけ

> i 3 7 2 7 < r u b y > < r b > 1 5 7 <

周 晴光</r b><r p>(</r p><r t>しゅう</r t
><r p>せいこう</r p></r u b y>

主人公その1。やることなすこと空回る馬鹿。しかもそれ本人気付いてない。笑われ時に殴られ蹴られ、二言目には『馬鹿』と言われるという愛情に日々晒されている。そしてそんな自分は幸せだと思っている。馬鹿な子ほどかわいい。

顔は中の上くらいである。見苦しくない程度見ようによっては爽やか。口をちよつと開くとうざやか。テンション高いとうざい。

恵まれた体格を持ち、同世代よりも頭一つ飛びぬけている(色々な意味で)。頭は染めているため赤いが、根は素直ないい子と他称さ

れ自称もする。
ライフワーク兼特技はバスケット。趣味はTシャツ集め。最近パーカーも気になる。

1 妖力奇談 式

「よろしくお願いします」

ビス・ケイリスは畳に手をつけて頭を下げた。晴光とエリカを両脇に挟んで座る彼の白い髪がふわりと揺れる。

長い前髪に隠されていない蒼の左目が雪女を見据えた。その体軀は小さい。

この地の人間ならば、中学校に上がるか上がらないかほど。しかし外見に見合わない落ち着きと確固たる意志をひしと感じた。

赤毛のその人は、伏し目がちに切れ長の目を細めてほほ笑み、彼に歓迎の意をもう一度示した。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

物語管理局とは、その名の通り、『物語』を管理する組織である。

『その人のすべてを物語とする』。人の想像力という力を以って、生まれた数多の世界の『筋書き』を守ることを主な目的としている。

道端の小石一つ、それが有るのと無いのと、それにつまづく人間が居るのと居ないのとで、物語が変わることさえあるのだ。

そのイレギュラー要素を除くのが、物語管理局、しいては夢人といわれる実行員の役目である。

「ニル」

物語管理局 夢人科 調整部 第五部隊所属、エリカ・クロックフ
オードは、制服の裾をひるがえし歩きながら片手の赤皮の本に語りかける。

『なあに？』

返事は間を置かず返ってきた。耳に通る少年の声である。彼はすぐにアスファルトに軽い足音を立て、その場に現れた。

黄色の民族衣装をまとった少年、ニルは、エリカから本を受け取り同じく歩き出す。身長は少しばかりニルが大きい。

「どうしたの？エリカ」

「別に」

「さっきの話？」

「……………」

眉を寄せたエリカの顔を見て、ニルは口を開く。

「僕ら『本』の一族の禁忌って知ってるよね」

「ええ」

「『異端と交わるな』つまり、我が一族の血を守れ。外に出すな。だから、名字というものを持たない本で、家名を持つ者は『禁忌の家名持ち』と呼ばれる。」

僕らが持つ能力は、『全ての力の増幅』。その血肉は不老不死の糧。僕らという人間は驕りおごりでもなく、天地を統べる第一歩になる」

人という特殊な種族が繁栄しだす頃から、この世界で他世界の存在を知りながら、血を守り力を守ってきた本の一族は、しかし、他世界の繁栄と技術の進歩と共にこの世界へ侵攻してきた一族以外の人間との共存を強いられる。

本とはつまり、人の想像力という無限の力を宿すもの。だから彼らは、すべての人間の、人間だけの力となる。

大きな力は世界を滅ぼすのだ。共存を選んだ一族はしかし、自分たちの能力を提供する代わり、一つの掟を一族と力を扱うことになるだろう人間達に出した。

『人と交わることなかれ』

『みだらに力をその身に取り込むことなかれ』

『それつまり、人という種の滅びの種』

「本は、物語管理局の人員提供を約束する。

夢人はもともとはただの人間だ。

世界は人間の想像力が許すまま、世界によっては何が起ころうともおかしくない。だから力の手段として、実行員の夢人に本の一族を各一人、パートナーとして同行させるようになった。

本の一族にはそれぞれ自分だけの『色』があるんだ。僕は、ほら、この黄色の眼」

ニルの瞳は言うとおり黄色で、肩に触れるほどの髪と同じこげ茶の丸い、人間にしては大きい瞳孔が浮かんでいる。

「赤・青・黄・緑・紫・そして黒。誰一人として同じ色は持たない。でも一色だけ、一族の誰も持たない色がある。

一族でも、その他の人間でもない彼らの色は、禁を犯した目印としてその身に刻まれ、変わることは無い」

- - - - -
- - - - -

絵のように整えられた中庭らしい場所から、板張りの廊下に夕日が差した。

先導するのはおかっぱに、着物姿の童女である。彼女は雪女いわく、『座敷わらし』らしい。

この屋敷に一番詳しいのは彼女なのだと雪女は言った。

低い位置にある黒い頭を見ながら、三人は進む。目線の近いビスは一番後ろをただ口を閉ざして歩いていた。

「……此処は、危ない人も多いから、あまり部屋から出ない方がいい」

脚を進めつつ、警告のように座敷わらしが声を発する。

「どのへんが危ねえの？」

不寐に聞く晴光に、控え目な座敷わらしは言った。

「……えっと、ここは学校だから、あまり出来ない……力の未熟な人も多いんだ。みんな人間慣れしていないから、はしゃいでうっかり、雪女のお客さんを潰したり、かじったり、殺しちゃったり……人の魂を集めるのが趣味の人もいるし」

「こわっ！マジかよ」

「あ、でも、外よりはましだから」

雪女の客を不快にさせてはいけないと思ったらしい座敷わらしは慌てて言葉を選ぶが、ズンと重い沈黙が落ちる。

これから彼らは、その『外』へ調査に出るのだ。

「……なアエリカ、俺、待機っていうの、駄目？」
「分かり切ったことを聞かないで馬鹿」

「いえ、そうしてもらいましょう」

一番後ろ。固い口を開いたビス「ケイリスクに、一拳に視線が集まった。」……え？」

「よっしゃー！！」晴光は一人、夕日に叫ぶ。
「ちょっと、隊長。いいんですか？」

静かに、ビスはうなずいた。

夕日が、彼の真白い髪を紅く染めていた。

> i 3 8 6 7 — 1 5 7 <

おまけ

> i 3 7 2 5 — 1 5 7 <

エリカ「A」クロックフォード

主人公という名のヒロイン。美人だけど性格がアレな感じ。最凶。

サッパリしているのでメンバー内で一番漢らしい。

瞳の色は紺。髪は黒。ありえないほど父似らしいが、中身と髪質は

母似。英日ハーフ。

趣味は魔法薬調合。

曾祖父、母、自分の三人家族。実家は英国のとある商店街のしがな
い小さな魔具専門店。

1 妖力奇談 参

銀糸が夕日に照らされながら揺れる。ビスはその薄い色の唇を開いた。

「今回の任務、自分の指示に従っていただきます」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

(人とはなんと恐ろしいものだろう)

この古びた屋敷の外観に反し、この学園が出来たのはつい最近のことらしい。

『最近』といっても、この学園に集うのは人ならざる者である。さかのぼるは、人が繁栄しだす百年ほど前。

もともと人と妖は布の縦糸と横糸のように、支え絡み合い世界を構成するものであった。

それが変わったのは、人が変化と自立と繁栄をにかけて闇から離れて行つた頃である。

人は変化を求めるものだ。闇に残された妖達は、そう言って自らも自立を掲げた。

しかし。

変化がより謙虚に起こったのは妖達の方だった。
支えを無くした彼らは一気に弱体化していく。

気づけば自らの足で立っているものはごく僅か。

増え続ける人の塊を避けるように、端へ追いやられた妖達は、闇を舐めるようにしか入ってこないごく僅かな人間達を糧に存在するようになった。

学園が設立されたのはそんなときである。

弱体した妖再教育施設。

集うのは感情の無い死神、鳴けない夜雀、踊らないしょうけら、雨を呼べない雨降小僧など。

座敷わらしなどは、とうに人のいない廃墟から屋敷に執着するあまり取り憑き雪女に連れてこられた、精神面での改善が求められる生徒だ。

そんな彼の人も、余波を食らって今や生徒の一人として在籍している。

嗚呼、何故あんなにも美しい人がこのような仕打ちを受けなければいけないのか。

あの人は生まれを違っただけの、ただ綺麗なだけの人だった。

何度も繰り返し、何故あんなにも優しくなれるのかと、私は思う。

同時に、私はあの人のためなら何だってできる、と思う。

もっと早く出会いたかった。もっと早く産まれたかった。

そうしたら……きつと。

ああ、人とはなんと恐ろしい。

かつては私も、その『ヒト』だったのだ。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

いくら眼を細めても闇は濃く、辺りを漂っていた。

濃緑の制服は、この緑の多い土地では良く闇に紛れる。

しかし相手はその闇を住みかとする者達である。当然、夜闇など自分たちで言う昼間と同じだ。

エリカは漆喰の壁の脇に沿うようにして進む足をとめた。

エリカ「クロックフォードは魔女である。

魔女と言つて最初に連想するのは、森の奥の鍋をかき回す老婆だろ
うか。それとも杖を持った少女か。

ジャンヌ「ダルクなどのヨーロッパの魔女狩りの罪のない被害者達
かもしれない。

彼女はそのどれでもなく、『一つの種族として魔法の使える者』と
しての魔女が一番適切だと僕は思う。

魔女と言いつても、彼女は人というくりは出ないと言つてい
たし、突然変異が増殖した特殊な人種の様なものだと考えてもらえ
ばいい。

どちらにせよ、彼女は人としてはかなりその闇に近いところにある
血筋なのだ。

彼女は慣れたように闇に眼を凝らす。指に力が入り、手袋に付いた
滑り止めが僅かに鳴った。

「……隊長は何を考えているのかしら」

彼女はこういった場面ではまったく言つていいほど口を開いたり
しないので、少し驚く。

「晴光は即戦力だもの。戦闘能力は私より第四部隊の晴光の方がず
っと上だわ」

「……まあね。第四は前線部隊だから」

大丈夫なのだと判断し、立ちあがった。とたんに感じる重力に慌てて脚に力をこめる。

落としかけた本を抱えなおし、僕は改めて彼女を見た。

晴光とエリカは、物語管理局内の夢人研修生として出会った。晴光が局に来て一年、研修を終えて一年。二年の付き合いだ。

そのころには彼女はもう僕と組んでいて傍にいたから知っているのだが、彼女と晴光は研修四年目とまるっきりの新人ながら、同い年ということできつつつけられたコンビだった。

今でもあだが、それも最初に比べたらマシだと思う。

なにせ彼女、まるっきり猫を被っていたのだ。何かと世話をやいてやりながらも最初はそれはもう酷い嫌われ具合で、よくまああの少年はめげなかったものだと思う。

表だって何かしたりは絶対にしなかったが、あれで勘のいい彼はエリカの不穏な空気を肌で感じていただろうから。

「でも晴光は諜報活動には向かないわよね。あいつ存在からして無駄が多くて五月蠅いのよ。詰めが甘いんだわ」

エリカが言ったのに、苦笑した。

しかし僕は知っている。彼女は本気で拒絶する時は、その存在すら否定するほど無視するのだ。

彼への彼女の扱いは、（こう言うと嫌な顔をされるのだけれど）ひとえに彼への愛によるものだ。

僕はニル。エリカ・クロックフォードとパートナーを組んでいる、『本』である。

おまけ

> i 3 7 2 8 — 1 5 7 <

ニル

エリカのパートナーの本。ミスターノーマル。

基本的に温和で世話焼き。今はやりの草食系。節約マスター。

エリカ・晴光の同じ年組より二つ年上。しかし童顔なので、実年齢を言っていると驚かれる。

1 妖力奇談 偲

「ぶええつつくしょン！」

とつぜん座敷に響いた大音量のくしゃみに、わたしは思わず肩を揺らした。ズズツ、と彼は鼻をすすする。

「ごめん」

「……風邪？」

「違うと思う。希望だけど。」

で、なんだっけ？」

わたし ファンは、彼の右斜め後ろに隠れるようにして座り、それを眺めた。
視界の端に自分の桃色の髪が揺れる。

「ここには生徒がいろはで三組。教師が筆頭に人魚、狐、雲外鏡、幽霊と四人居ます。成績優秀者が教師を務めることもあります。いろは三組はそれぞれ能力別に振り分けられていて、合同に授業をすることも多いです」

「へーっ、結構俺たちと違うな。なんか楽しそう」

楽しそうに笑う彼の声に驚いたのか、身を縮込ませた彼女と眼があうと、彼女、座敷わらしは今度はまずいものを見たかの様にぎょつとして眼をそらした。

その反応に思わずこちらも眼を伏せる。

外はすっかり真っ暗になってしまった。

危ないという『外』へ出て行ったみんなは、まだ帰ってこない。

待機を命じられたものの部屋でじっとしていることが苦手な彼は、彼女に話し相手になってもらっている。

話すのは、もっぱらこの世界や学園の事についてだ。

「勉強ってどんなことすんの？」

「えっと・・・歴史、語学（国語）、算学（算数）、道徳、とかですね」

大分慣れてきたのか、彼女の口からはすらすらと言葉が出るようになってきていた。

「先生は一人を除いてみんな何百年も生きてる人ばかりです。生徒の方はあたしみたいに若いのも多いですが、雪ちゃんみたいに先生達くらい長く生きてる者もいます」

「雪ちゃん？」

「雪女さんのことです。名前より雨童子や夜雀って呼ぶ方が多いの。雪ちゃんはみんな、『雪ちゃん』か『委員長』って呼びます」

「へー仲良いんだな、みんな」

「……うん。仲いいの」

座敷わらしは肩をすぼめて恥ずかしそうに俯いた。

- -
- -
- -
- -

今回の任務は、^{イレギュラー}異端排除というシンプルなものである。

異端は物語の筋書きを狂わせるもの。その度合いは、星程の大きなものから小石の様な小さなものまで、しかしその小石が星の軌道を狂わせるほどの威力を持つこともあるという極端なものだ。

これは現地で調査しない限りわからない。ステイルは今回に一番に近い『事例』を、頭の中の記憶の頁をめくるように探った。

物語とは、人が創る一つの世界。

人が考え、想い、願う。それが反映される。人そのものといってもいいかもしれない。

だからこそ、人の数だけ、人が生きる一分一秒の数だけ世界は存在する。

同じ筋書きを辿ろうと、途中で違う場合も多々ある。

だから、より求められる物語の世界は何が起こるか分からない。
この世界は

『妖カ奇談』という物語は、雪女を中心とした妖再教育施設の生徒、教師の妖達それぞれを主人公とした小説短編集である。
人気はそう大したことは無い。

出版はされたものの、重版は大してされてはいないし、まさに『知る人ぞ知る』物語だ。

だからこそ、こうして物語管理局という自身も『異端要素』イレギュラーである存在が協力を求められる。

これくらいの世界なら数多星の数ほど存在する。そう珍しいものではない。

スティールの『弟』であり、今は仕事上の『パートナー』であるビス・ケイリスは黙ったままだ。

草の青臭い匂いが立ち込めるこの場所は、空気にも地面にも水気が多くあまり長居したくはない。

ステイルは分身ともいえる本を抱えたまま、白髪を夜の風に揺らした。

「深そうだねえ……………」

目の前にはただっ広い沼が、うつそうと茂る緑に縁取られ、月に黒く光っている。

脚を取られて溺れでもしたら、草に隠れて恐らく死体は見つからないだろう…………殺人を犯す予定はないが、ステイルはぼんやりと沼に映り込む月を見ながらそう思った。

小柄な弟は体半分を草に埋めて沼をじっと見つめている。

「……………今日は満月か」

「……………」

「

ビスは、じっと待っているように見えた。

『妖カ奇談』という物語は、雪女を中心とした妖再教育施設の生徒、教師の妖達それぞれを主人公とした小説短編集である。

それぞれ童謡の名前の付いたタイトルで、表題の『妖カ』とは『八日』、『妖華』とかける。

『妖華』 つまり、『妖しいほどの美しさを持つ人』。中心となる物語の主人公の“一人”、雪女だ。

この物語には一貫してもう一人、中心となる主人公が居る。

『8』という数字は、死を連想させる『四』の連続、つまり『二度目の死』を表すのだと作者は言った。

つまり、学園で登場する妖で、一度死んだ人間 幽霊のことである。

月が暗い水を中心に落ちる。

>
i
4
2
8
6
—
1
5
7
<

1 妖力奇談 護

今日の月は、まるであの人の瞳の様だった。

- - - - -

音を立てて襖が開く。

「・・・雪女さん」

声と共に滑り込んできたのは少女だ。

スカートの無いセーラー服姿の彼女は、月明かりだけの部屋、チヨコレイト色に光る髪を揺らして雪女の横顔を見た。ゆるく波打つ背までの髪は、彼女をこの平成に生きていた者であったことを象徴している。

雪女は緩く笑って無言で横に座ることを促した。

幽霊と呼ばれる彼女は、視線をさまよわせながら腰を下ろす。

「あの、雪女さん、わたし・・・」

「朝子ちゃん」

幽霊 「朝子」だった彼女の言葉をさえぎって、雪女は困った様に笑う。首を傾げた拍子に、肩を赤毛が滑り落ちた。

「君の名前は、朝子ちゃんだろうか？」

「
つ、照朱郎さんしょうしゅうろうさん……」

朝子は知っていた。

彼が、自分の名前を嫌っていることを知っていた。

彼女は乞うように畳に額を擦り付ける。

「すみません照朱郎さん……すみません、わたし」

悲しい。

寂しい。

怖い。

この人はとても綺麗。

この人はなんて優しい。

「今日来た、あの人達……きっと、わたしを」

異端のわたしを、慈しんでくれる。

「私はここに集う人を追い出したりはしない。ここは私の屋敷だからね」

「でもわたしは、ここに居るべき者では無かった・・・」

最初から、きつと最初から・・・きつと、わたしはここに居るべきでは無かった。わたしのこの場所にはきつと他の人がいたんです。わたしは・・・」

揺れる声が畳に染みを作る。

彼はきつと知っていました。

彼はきつとわかっていました。

彼はきつと

今日の月はまるであの人の瞳のようでした。

あの小さな子供はちっけなもので、あの人に会ったころの自分を思い出します。

人と妖の境に生まれた私は、過去どうしようもない半端ものでした。恐らく、あの頃の自分は紛れもなく、当時の世界からしてみれば『異端』だったのでしょう。

そんな私は、なぜだか。あの人という存在を、大きく見てしまうのです。

「………忘れたところに、なんて、どこまでも皮肉な方だな、あの人は」

朝子ちゃんが居なくなった部屋、一人唇を釣り上げる。

彼女がこの世界にとって『違う』ことはわかってはいた。それなのに。

「失礼します」

襖が開く。

次に入ってきたのは、彼女でも、この学園のものでもなかった。灰蒼の眼、灰色の髪、異邦の色の者は、微笑を浮かべて場違いな修道女の恰好をしている。

先ほど彼女がいた場所に腰をおろし、使いは口を開く。

「大きな独り言ですね」

「放っておいてくれるかいお客人」

声は厳しい。

「どういうつもりだ、あの方らを呼び込んだのは君らだろう?とんだ嫌がらせだね」

朝子ちゃんをどうするつもりだ。

暗に、そう言つて照朱郎は眉をきりりと釣り上げた。「あの子^{もの}はもう学園の教師だ」

「確かに、彼女の性根が曲がっているのはわかっていますけどね？
僕らは使いつぱしりに使われただけの、むしろ被害者ですよ」

使いはとびきり大きな溜息を吐いた。

「ああ、申し遅れました。エルディア、気軽にエルとお呼び下さい
委員長様」

「戯言を」

照朱郎は吐き捨てる。

「あの人はどうせ、僕らを仲間だとも思つてないですよ。僕らをただの駒だと思つている。ありそうな話でしょう？」

肩をすくめるエルに、照朱郎は一片も不穏な顔を崩さない。それを見て、エルは大仰に腕を広げると芝居がかった仕草で右手を頬に当てた。

「ですがねえ・・・貴方には大変に残念なことに、今回は彼女のことではないですよ。関係が無い、わけではありませんが」

「なんだ、と？」

照朱郎の顔が固まった。

「今回は別件です。とっても大きな
る、ね」

そう、貴方にも関係す

1 妖力奇談 陸

長い指が心の臓を指す。

「貴方の血」

弓なりに細められた灰蒼の瞳。それが金に見えたのは錯覚だ。

「貴方の系譜^{けいふ}」

かつての子供が頭を持ち上げる。

（ 悲しい、寂しい、怖い、恐ろしい…… ）

「貴方の素晴らしいお祖母様の血」

当てられた指の先が胸を抉る。言葉は針か。否、刃か。

照朱郎はぶるぶると震えた。

開いたままの襖の影。そこに立っている者から目が離せない。
知らずのうち、後ろに手をつく。

「 おばあさまの、 」

「 ねえ、どこを見てるんですか？ 」

（嗚呼、やはりあの人は性根が悪い　　）
まさか今更、掘り返されることだとは思わなかった。

（いつから、あそこに・・・）

ただの、使いならばこうはならなかっただろう。

耳は声を拾う。眼はそれに奪われたまま。

「貴方もまた異端」

まるで傷に刷り込まれる塩だ。体は動かない。

襖の向こうに立つ人間。ああ、あれは確かに人間だ。

（おばあさまの髪は私と同じ赤毛だった）髪は黒。

（おばあさまは白や淡い桃色が好きだった）纏うのは喪服の様な黒だ。

（おばあさまの目は、顔は　　）決して大きいとは言えない人だった。背は彼女より頭一つよりも大きい。

大きな黒い目、血の気の失せた肌、薄い桃色の唇。
「・・・・・・そっくりでしょう？」

そして、目の前の修道女の声に震える。

久しく見ていなかった顔がそこにいる。久しく聴いて
いなかった声がすぐ傍でする。

> i 4 2 8 8 — 1 5 7 <

月は天に差した。

沼の中心に光が差す。

映り込んだ月は、しばし定住し、やがてゆらりと揺れた。

じっとそれを見つめる兄弟は、波紋がやがて大きくなるのを待つ。

揺れる金の月
流れる波紋
きらきらと輝く金色の輪

（似てるな）

これは恐らく兄弟共通の思いだっただろう。感情の分かりにくい弟も、既視感を覚えるその光景に眼を奪われていた。

思い出すのは、父の瞳。

暗い水の底から手が現れる。

空をつかむように右往左往したその
左手らしき手は、水

の表面、水面に手をついて、水の中から体を起こした。

緑の髪に月明りに照らされる青白い肌、水と同じ色の双眸。

「アラ」

驚いたように声を上げ首を傾げた『彼女』の腰から下は、間違っ
となく、尾ひれが付いているのが見える。

「お待ちしていらしたの？」

「
・・・人魚」

ポツリとステイールは呟いた。

おまけ

> i 4 2 8 3 — 1 5 7 <

垂れ目です。マフラーの色はオフホワイト。
背後のパンダは作者の世をしのぶ飯の姿。

1
妖力奇談
質

やさしいやさしい人。

あまいまいそれは、いつまでもいつまでも欲しいもの。

それを敢えて与える者は、さて、愛ある母か、それとも考えなしの愚か者か、それとも狡猾な策師か……。

... ψ , ψ , ψ .

[illegible]

「いつまでこうしていればいいのかしら」

エリカはぽつりと言った。となりのニルはそれに重なるように欠伸をする。「今、何時くらいだろ」

エリカはチラリとポケットから出した時計を見た。

「……九時三十九、イヤ、四十分ね」

「えっ、もうそんな時間!？」

会話に割り込む声。

エリカは身をひるがえし、二メートル後ろにさがった。本はすでに腕の中だ。

先には驚いたように灰蒼の眼を見開いた修道女が立っている。その後ろには影のように、ひよりり背の高い人物が従っていた。

「・・・あれ？」

戦闘に構える体制に入ったエリカを見て、心なしか焦ったように修道女はタラリと汗を垂らして声をこぼす。

「ごっ、ごめん!まさかそんな驚くとは思ってなくて」

ぶんぶん両腕を突き出すように振り、敵意のないことを示しながら修道女は言った。

「僕、エルディアっていいいます」

こっちはリユー。後ろの影を差し、にこやかにエルは自己紹介した。

(妖には国籍なんて関係ないのかしら)

エリカはじっと、二人を観察するような視線を残したまま、思考を巡らせた。

夢人と呼ばれる職業の者達は、物語の世界に飛び込むのだからして、『原作』をある程度知ることになる。

当然、エリカもひいてはニルも、この世界の世界観、登場人物等も頭に入れていた。

しかしこの世界はファンタジー、妖怪の世と人の世、二つの世界の混在する世界。登場する要素と言えば妖達を筆頭に人の想いの具現化である幽霊、異能者、異界と呼ばれる異世界の存在も認められている。

いわば、『何でもアリ』の世界観だ。

それに加え、物語にはその世界に居る全ての人間が事細かに登場されるわけではない。

いわゆる、『モブ』とよばれる描写されない登場人物も存在する。

これ全てを踏まえ、一瞬で思考を終わらせたエリカはゆるやかに唇を釣り上げた。

「ごめんなさい今職務中で。ちょっとピリピリしてたわ、気にしないで」

エリカはクロックフォードです。

人当たりのいい仕事に真面目な少女を装い、柔らかく彼女も自己紹介を返した。

1 妖力奇談 質（後書き）

評価・感想してくださると嬉しいです。

さて、書き上げたらすぐ上げるべきか、計画的に書き溜めて上げるべきか・・・

（櫻）

1 妖力奇談 奴

「僕らも今日仕事で来たんだ。雪女さんへの使いで」
笑顔を決やさず、エルは言った。

「あら、あの人の？さっき会ったわ」

「うちのリーダー、人使い荒いったら。あちいけーこっちいってこいー、って」

「旅する仕事なの？」

「あは。そんな感じ。ねっリユー」

急に話を振られた影の様な人物は、慣れているのか静かに首肯した。

「いつかはどこかで静かにダラダラ過ごしたいな、って思ってるんだけど。何分、僕ら働き者だから」

エリカは大袈裟に驚いて上目づかいにエルを見た。「その年でそんなことを考えるの？それともまさかとは思うけど、見た目通りの年齢じゃないのかしら」

夢と仕事に小さく胸を張る彼女は、一見エリカとそう外見年齢の差は無い。

「やだなあ、僕まだ17だよ。リユーは16。エリカちゃんも同じくらいでしょう？」

（……よくやるなあ、エリカ）
本はエリカの右手に収まったまま、素直に関心した。

真つ黒い猫の様な外見だからか、猫かぶりは彼女の十八番だ。おはじ

引きだす色は真面目で無知な、少し不器用な少女。その世界に入り込む演技力は、老年の教官に手放しで褒められたほど。

エリカは何気なく右手を動かし、腰に手を当てるふりをしてニルを背に回した。

『背中を頼む』、つまり『警戒せよ』の合図だ。

（了解）

いつでも姿を現せる状態に（気分的に）構えながら、ニルは頭半分、のんきに考えていた。

（あの人、エリカの嫌いそうなタイプなのに）

身ぶり手ぶりを交え朗らかに会話する修道女は、例えば少しあの赤く髪を染めた大柄な彼に似ているかもしれない。

エリカという少女は公私わけるタイプではあるが、だが天然そうなのふわふわした雰囲気は癪に障りそうだ。現に、普段を知るニルから見れば、この無駄に見えるほど輝かしい作り笑いは少し冷やりとするものがある。

一見和やかに会話を進めていくエリカは知らなかった。

こちらだけではなく、相手の顔も幻だということを。

この世は恐ろしい。

あの得体のしれない使者たちは恐ろしいことを言って去って行った。

ああ、どうしようどうしようどうしよう。

私は知っている。

あの人が、あの人が。

いつも一番に思うのはこの学園のこと。そして今亡きお祖母様の想い。

あの人の誇りの根には、いつでもお祖母様という存在がある。

その血を疎ましく思う反面、誇っているのだ。

私はその場から動けなかった。否、動かなかった。
そして聴いたのだ。あの使者があの人に迫る瞬間を。

「照朱朗さん……！」

先ほどのが嘘のように足は部屋に雪崩れ込む。

「大丈夫なんですかやはり私のせいですか！私は、わたしは」

「落ち着いて、朝子ちゃん」

僅かに低く、彼はぎこちなく笑い、言った。

「大丈夫だよ。君のせいじゃない」

「……でもっ」

「でもない。良く聴きなさい、朝子ちゃん。

この学園に存在し教鞭を取る限り、君は学園が守る。いいかい、覚えておくんだ。

君はもう人ではない。『人であつたもの』、『幽霊の朝子』だ。油野朝子じゃない。もうそろそろ迷いは捨てなければならぬよ。君

はもうただの朝子なんだ」

何故それを今言うのか。

それが私には分からなかった。

「ここで生きていくのなら『朝子』という一つの存在になりなさい。君はもう幽霊で、人ではないんだ。

そうじゃないと、私はもう君を守りきれないよ」

（何故それを今言うの）

この世の全てが恐ろしい。

この人にこんなことを言わせる世界が恐ろしい。

1 妖力奇談 奴（後書き）

IRREGULAR のPVっぽい出来ました。

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm9897862>

1 妖力奇談 求

（もう一人の幽霊の話）

泣く子供。それをほほ笑んで見やるあの人。

何故、何故、どうして。どうしてそんなに優しくするの。

あの人はいれが来てからわたしのもて来なくなった。わたしを放つておくようになった。

「お前はもう大丈夫だろう？」

貴方がそう言うのなら大丈夫なのでしょう。私はもう大丈夫。

だってもう大人だもの。時は止まってしまったけれど、ずうっとここに居たんだもの。もう自分で考える頭だってあるの。

子供は泣く。

何故泣くの。あの人が居るじゃない。なのに何を泣くことがあるの。所詮、餓鬼の無い物ねだりだ。

自分が私より大人だっていうのなら、それなら我がママをいうんじゃない。私がずっと我慢してきたことを、何故、何故お前がそうやって泣いてほしがる。

それは私のものだ。

ワタシのものだったのに……

「なぜ、彼女があなた達の言う、異端者だって言うのかしら？」

沼の淵、葦の上にしだれかかりながら至極楽しそうに、人魚は言った。時たまパシャリと尾が水面をはじく。

「簡単なことですよ」

「『筋書きに沿わないから』です。彼女はこの世界の筋書きの中心人物と言っている。

原作に登場する『幽霊』と呼ばれる彼女は、『快活で明るく行動力のある、しかし幼い思考の少女』とあります」

兄の言葉を引き継いで言った無遠慮なビスの言葉に、人魚は水面を震わせて笑った。尾が激しく水の中を円を描くように動きまわった。

しかしビスとステイルは、無表情と笑顔という対照的な表情を変えない。

「ふふふっその通りですわね。……確かに彼女は『明るく快活』
とは言い難い」

身内を侮辱されたともとれる言葉にも、彼女は楽しそうに指をその長い髪に絡ませる。

「彼女は教員のくせして、うちの学級委員長あのこの崇拝者ですわ。……まあ年齢としては学級委員長のほうがずっと上ですけれど、人魚は僅かに瞳を伏せ、小さく呟くように言った。「所詮、生きた年月を合わせようと精々二十年ちよつとの小娘」

少女に見えるその姿に、貫禄と哀愁を漂わせて人魚は続ける。

「さて、それでは何故、あなた方はその『容疑者』ではなく、わたくしのところにいらっしゃったかしら？」

それはまるで、「すべてわかっている」と暗に告げているようだった。

[illegible]

私は世界が恐ろしい。

でも、でも。

大好きな人たちが存在する、この世界がどうしようもなく愛しくも感じるのです。

もう帰れない生まれ育ったあの世界と同等か、それ以上に。

私は世界から弾かれました。けれど。

私は幽霊。

なのに可笑しいですね、私はここで生きています。

私の制服には胸元を飾るスカーフがありません。

けれど、私はあの世界よりもずっと、年上の生徒達と『青春』というものを謳歌しているのです。

『先生は生徒から学ぶ』といいますが。

私はここで生きています。

だから私はなかなか『油野朝子』を捨てられないのかもしれないかもしれません。

死んでいるのに可笑しいですね。

私はここで生きたいと思ったのです。

1 妖力奇談 求（後書き）

三月中に二章に行けたら、いいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3018j/>

IRREGULAR（2009年試作版）

2010年11月19日00時05分発行